



短角牛増産

雌繁殖から

飼育頭数の減少が続く県産短角牛の増産を目指し、県と県産業技術センター畜産研究所（野辺地町）が本年度から、繁殖に必要な雌牛を短期間で増やす実証試験に取り組んでいる。脂身が少なく赤身が多い短角牛は近年、消費者の健康志向の高まりから需要が増加。生産体制を強化することでこうした需要を取り込み、県産短角牛のブランド化と販路拡大につなげる狙いだ。

（永野悠太）



雌牛を短期間で増やす実証試験に使われる短角牛＝県産業技術センター畜産研究所

技術確立へ実証試験 2年間

肉用牛を増やすためには、子牛を産む雌牛が必要だが、通常の繁殖方法では雄と雌が同程度の割合で生まれ、増産に時間がかかる。このため実証試験では、双子の雌子牛を産ませる技術の確立と普及を目指す。期間は2018年度までで、試験を同研究所に委託した県は事業費として17年

度予算に594万円を計上した。専用の器具で牛の受精卵のDNAを解析し、性別を判別。雌と判定された受精卵2個を母牛に移植する。母牛の健康状態などによるが、受精卵が子宮の中で順調に成長すれば、双子の雌子牛が生まれるという。雌子牛は県内の繁殖農家（雌

牛を飼う子牛を産ませる農家）に販売し、繁殖用として使ってもらう。畜産研究所は現在、実証試験で使う受精卵や雌牛の準備を進めている。同研究所繁殖技術肉牛部の平泉真吾部長は、黒毛和種の受精卵を短角牛と乳用種の雌牛に移植する実験を行った際、短角牛の方が双子が生

まれる確率が高く、難産も少なかったと説明。「短角牛は体が大きいので双子の生産に向いている」と分析する。県は農家に短角牛を飼育してもらうため、ワインの搾りかすなどを飼料に活用し、生産コストを削減する試験にも取り組む。短角牛は黒毛和種に比べて取引価格が安く、採算性が低いからだ。県の調べによると、短角牛は1978年に県内で約

1万3100頭飼育されていたが、16年には約20分の1の660頭まで減少。一方で、黒毛和種は約9800頭から約2万3600頭に増えている。牛肉の輸入が91年に自由化されて以降、輸入牛肉と肉質で競合する短角牛から、高値で取引される黒毛和種への切り替えが進んだことが見て取れる。

県畜産課の中野晋課長は、短角牛が北海道や東北3県で飼育されている希少品種であるとし「青森のブランド牛としてPRできる。小売業者の需要に応える生産体制を整備すれば、（業者と取引頭数を決めた上で飼育する）契約生産を行えるようになり、短角牛の価格が上がる可能性がある」と期待する。